



中高生とともに差別と闘う

『ミナコの本音』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



マリアの応答

意を決したマリアの言葉に続き、父母や祖父母を亡くした同級生の思いが語られていきます。

マリアと仲の良いレナも応えませんでした。レナもマリアと同じく学習会に通う、幼なじみでした。

「マリアが自分のことバカって言ったけど、そこまで考えて発表できるのって、絶対バカじゃないと思う。おばあちゃんのことを考えて、両親揃ってなくつても、いなくても、何ヶ月しか一緒に住んでなくても、今一緒に住んでるおばあちゃんだったり、いとこだったり、お母さんらしいことをおばあちゃんや、一緒に住んでる家族にしてもらってると思う。だから両親揃ってなくても、どっちかだつても、全然恥ずかしくないし、一人の大人として生きていけると思う」

レナにはレナの深い思いがありましたが、まだそこにはふれられずじまいました。

カレンも続きます。カレンも、マリアやレナと同じ地区出身の学習会に通う幼なじみでした。

「こうやってみんなが前より言えるようになってきて。マリアもつらいと思うけど、みんなもいろいろな問題があつてつらいと思うけど、絶対に言えることは、頑張るのは一人じゃないってこと。」

なあ、マリア。お母さんいなくても、おばあちゃんに支えられてきたよな。だから、やっぱり何があつて

も一人じゃないって思ったら、頑張れると思う。私だっているいろいろあるけど、頑張ってきたんだから。以上です」

カレンもレナと同じでした。本当に言いたいことには、まだふれられていませんでした。そんな気持ちを慮って言ったマリアの言葉で、この授業は締めくくられていきます。

「親がいない人は、この中にも何人もいるし、ホントは言えないことだつてあると思う。笑つてもつらそうにしてる人もいるし、笑つても楽しくそうに笑えてない人もいると思う。みんな、ホントに思うことが、何かあると思う」

変わっていくマリア

マリアはこの日から明らかに変わっていききました。それまでも、三年生になって変わってきたように感じられてはいましたが、やはりこの日之境に変わってきたように感じます。

以前は、教室にいても授業には参加できておらず、叱られることの多かった彼女が、一生懸命ノートをとり、分かるうとしはじめました。一杯、自分を表現しようとしはじめました。「他者から認められている」という実感が、彼女自身の不安を少しずつ取り除き、安定した頑張りへとつながっていったのだと思います。自分の中にいる自己にしっかりと向き合い、自分の「本音を語る」こと。その勇氣ある自己解放が、本

当の強さへと変わっていったのだと思います。

周囲の者も、長年共に過ごしてきたのでマリアのことを分かっていたようなつもりでしたが、実はよく分かっていたいなかったということが実感できた時間となりました。やはり、本音で語り合うことだと思えます。その関係性において、人は成長していくのだと思います。

この時間を基点に、この学年の本当の絆が紡がれていくことになりました。

ミナコの本音

「あの日の授業の続きを」という声が子どもたちからあがり、翌週に再度、合同人権学習が開かれました。ここでもまた、壮絶な語り合いが続くことになりました。

前の時間、マリアをはじめとしてみんなが家族のことについて話している間、ミナコはずっと泣き伏していました。ミナコにも、ずっと胸のうちに秘めていた家族への思いがありました。

「この前、マリアが家族のことを話してくれたんだけど、その時すごく泣いてしまつて。なんでかっつうと、…私の両親は離婚して、今は父さんの方に住んでるんだけど、第二人は母さんの方に住んで…。」

五年生ぐらいの時からそんな話が出て、六年生ぐらいの時に学校に行きたくなくなつて…。それでずつ

と保健室でいた時があつて…。

ミニバスケットにもほとんど行けなくなつて、キャプテンなのに申し訳なかつたなつて…。後悔してます。

月一回ぐらいは母さんとも会ってるんだけど、最初の方はムカついて、会つてもあまり目を合わさなかつたし、メールが来ても返さなかつたし、電話も出ないときもあつて…。母さんにはすごくつらい思いさせたなつて、今になって思つたりして…。」

ミナコは学年のリーダーとして、小学校から引き継ぎをされてきました。ミニバスケットボールではキャプテンもし、しっかり者ではあるのですが、どこかクールで、気の許せない堅さのある女の子でした。

ミナコの話は続いていきます。「母さんには、『母さんところにおいて』って何度も言われて。でも、私はやっぱりここが良かったし…。父さんとお祖母ちゃんがあんまり仲良くななくて、だからそれも心配だったし…。」

中学一年の時におばさんが亡くなつて、父さんには、『母さんに余計な心配させたくないから、このことは言わなくていい』って言われてたけど、だけどやっぱり母さんも知り合ひだし、知り合ひが死んだことを知らせないのつてやっぱり何か違うなつて思つて、ずっと二年ぐらい悩んで…。」

(次号に続く)